

4424
4





4424
4

陽太
四 = 9
月 8 未
十 八
文 十
夜 31

激流の如く
心明な文壇史
江見水陰

ニ
カ
コ
シ

見

◇自己中心明治文壇史◇一六

激流の如く

江見水蔭

男性的文学

明治三十四年一巻

博文館発行

少年文学とは、日本最初の少年小説（今の所謂童話）の出版で有つて、当時の少年は勿論、家庭の大人達も非常に

見

小波の

つれ 第一篇 ^可 黄金丸 ^の 傑作で有つれのは
勿論であるが、色摺本版の口画 ^{表紙} は、多岐
のコマ画を入れた、和洋製四号活字の四六版
百四五十頁。それ ^で 定価十二銭とくふ廉價
~~で~~ 博 ^し 一原素
で有つれうい。

其第二篇は紅葉山人の ^可 二人 ^{あつ} 探助 ^の 有
つれ。けれども是は全然失敗の作で、主人公
の探助が母親を殺す事や、結末の文章も――
善人ありとも愚鈍は七び、悪人ありとも智者は

A1020 香山三河屋書店

探助

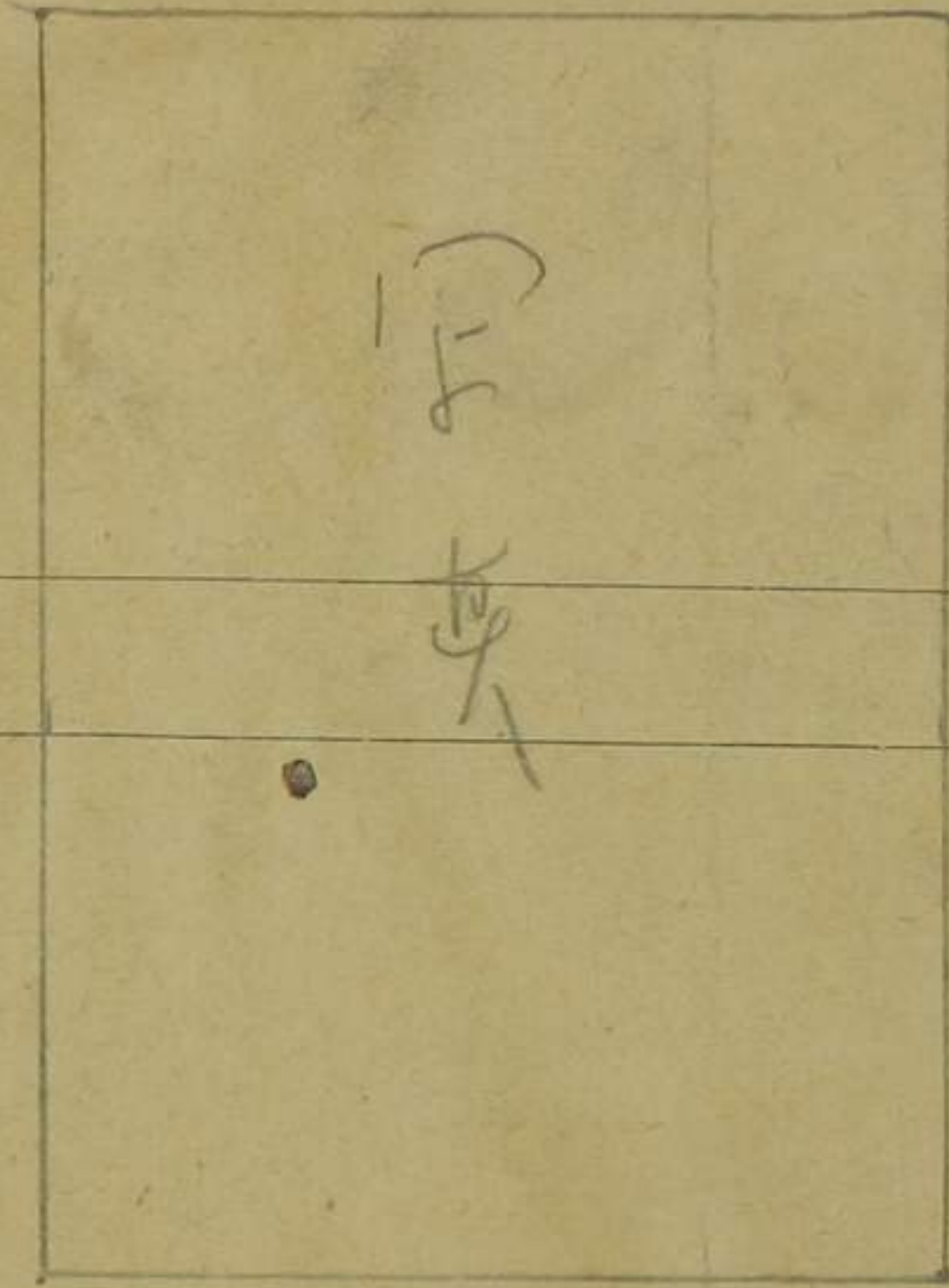
見

世の例——と結んどの、教育家側の反
 對を買つて、紅葉は去張人情移ぬい。子
 供の好はイヤあい。と世の評で、五月三
 十一日東京中新聞の紅葉評言は、
 天下之を難く少年を誘ふるを許さず
 と、極論しぬ。この評者は社本太郎君と
 有るが、廣津柳浪の匿名だ。同じ見友社員で
 若し紅葉の世評で中新聞に入ると得ぬ柳浪が
 り、之ほどまで極むる上げなく、好い
 のが、仲間内ばかりで、社外から賤す

No.

見

八七欠



紅葉の人山人

見入

武者^{ウケ}の^ウ 疝癬^{センセン}太^ウの^ウ 夏の^{ナツ}館^{カン}の^ウ 五種^{ゴシュウ}で有る。
 この^ウ 短篇^{タンペン}十種^{ジュウシュウ}の^ウ 好評^{コウポウ}で有^ルつた^ルもの^ウ、短
 篇家^{タンペンカ}として^ウ 世間^{セカイ}から^ウ 認識^{ニシキ}され^ルた^ル。自分^{ゼンブン}も亦^ウ 短
 篇^{タンペン}が好き^ウで有^ルつた。
 春陽堂^{チュウヨウドウ}からは^ウ 木版^{キバン}半紙^{ハンシ}摺^{ズリ}の^ウ 新作^{シンサク}十二^{ジュニ}巻^{マキ}
 の^ウ 他^ウは^ウ 文学世界^{リョウガクセカイ}と^ウ 同輩^{ドウバイ}と^ウ 美術世界^{ミユウセカイ}と^ウ 大連世
 版^{タイレン}印刷^{インブツ}と^ウ は^ウ 他^ウは^ウ 美術^{ミユウ}世界^{セカイ}と^ウ 大連世
 界^{タイレン}と^ウ リン^{リン}の^ウ 同輩^{ドウバイ}から^ウ 出^ルて^ルる^ル。又^ウ 活字
 の^ウ 聚芳^{キュウホウ}十種^{ジュウシュウ}と^ウ リン^{リン}の^ウ 出^ルて^ルる^ル。
 文学世界^{リョウガクセカイ}の^ウ 第七^{ダイナナ}卷^{マキ}と^ウ は^ウ、自分^{ゼンブン}は^ウ 野試^{ノシ}

No. _____

といふ、^ウ そんな^ウ 同輩^{ドウバイ}代^{ダイ}要^{ヨウ}は^ウ 断^{タン}して^ウ さい^ウ かつ^ウ 批
 評^{ヒョウ}は^ウ 斯^カくの^ウ 如^カく^ウ 嚴^{エン}正^{テイ}で^ウ 有^ルつた。^ウ (その^ウ 現^{ゲン} 友^{ユウ} 社^{シャ})
 は^ウ 閑^{カン}を作^ルつた^ウ 様^{サマ}は^ウ 之^ウ は^ウ 難^{ナン}く^ウ 一^ウ 某^{カシ}之^ウ 老^{ラウ} 文^{モン} 士^シ の
 在^ウ る^ウ の^ウ は^ウ、嘆^{タン}か^ウ べ^ウ ー^ウ だ。^ウ
 第三^{ダイサン}卷^{マキ}として^ウ い^ウ ぶ^ウ づ^ウ 自^ジ 分^{ブン} の^ウ 今^{イマ} 朝^{アサ} 讀^{ヨミ} 本^{ホン} の
 出^ル 版^{バン} さ^ウ ら^ウ ぬ。^ウ さら^ウ は^ウ 五^{イツ} 月^{ゲツ} 十^{ジュウ} 四^シ 日^{ニチ} で^ウ 有^ルつた。^ウ 幸^{サイ}
 ひ^ウ ず^ウ を^ウ 好^{コウ} 評^{ポウ} で^ウ 有^ルつた。^ウ
 一方^{イツフウ} の^ウ 評^{ヒョウ} 要^{ヨウ} は^ウ、^ウ 短^{タン} 篇^{ペン} 十^{ジュウ} 種^{シュウ} の^ウ 後^{ウチ} 半^{ハン} 事^ジ
 き^ウ び^ウ した^ウ。前^{マエ} の^ウ 五^{イツ} 種^{シュウ} は^ウ 現^{ゲン} 代^{ダイ} 物^{モノ} で^ウ 有^ルつた^ウ の^ウ、後^{ウチ}
 の^ウ 直^{チキ} 経^{キョウ} 年^{ネン} 文^{モン} 学^{ガク} 者^{シャ} の^ウ 直^{チキ} 経^{キョウ} 年^{ネン} 語^ゴ の^ウ 畫^エ 軒^{ケン} の^ウ 骨^{ボネ}
 A 10 20 青山 三河屋書店製

6見

合とつふりを脱稿した。六月二十日、それを
 持って春陽堂を訪ねた時、主人の著書部
 へ、
 皆さん、同じ様、原稿を合りませう、甘ん
 びますが、有夫が相場でお掛ひ致しますと
 云つて、七円五十銭出して貰った。然るに同
 堂の厚い判取帳に受取を記入させられたので
 有つた。
 文学界の自分の前には、紅葉の命の
 安房の美妙の猿百鬼考の二十三階堂の
 くし妻の陣の糸の忍月の辻堂の正
 太夫のかくれんぼと云つた風を、当時の
 流行の子の話を揃へたので、其中は自分の
 撰つたのは、大分世間から送られる証書を
 有つた。(出版は八月二十日、有つた)
 野村胡堂の評と幸ひして悪い方では無か
 りな。変り者の高瀬文淵おじは、極力
 差をなす(それゆゑ後、イーストレーキ筆の
 東京スポーツに「トール」は英譯して「
 この時友人達は、江見はスポーツに「トール」が

No.

A 10 20 青山三河紙店製

この時友人達は、江見はスポーツに「トール」が
 合とつふりを脱稿した。六月二十日、それを
 持って春陽堂を訪ねた時、主人の著書部
 へ、
 皆さん、同じ様、原稿を合りませう、甘ん
 びますが、有夫が相場でお掛ひ致しますと
 云つて、七円五十銭出して貰った。然るに同
 堂の厚い判取帳に受取を記入させられたので
 有つた。
 文学界の自分の前には、紅葉の命の
 安房の美妙の猿百鬼考の二十三階堂の
 くし妻の陣の糸の忍月の辻堂の正
 太夫のかくれんぼと云つた風を、当時の
 流行の子の話を揃へたので、其中は自分の
 撰つたのは、大分世間から送られる証書を
 有つた。(出版は八月二十日、有つた)
 野村胡堂の評と幸ひして悪い方では無か
 りな。変り者の高瀬文淵おじは、極力
 差をなす(それゆゑ後、イーストレーキ筆の
 東京スポーツに「トール」は英譯して「
 この時友人達は、江見はスポーツに「トール」が

国民之友 第三百三十九号
匿名ではあるが、不知庵の評
して曰く。

硯友社中近頃名筆の評
ある水滸氏の作あり、心影
龍、一刀直、武者修業、業物、
鈍味、是等皆水滸氏の好物
として奇骨様々との評あり、
是のなるあり。奇骨様々一果
して幾何の價值ぞ、是は
別問題とて、艶を以て賣出
せし硯友社員中、奇骨様々
たるは、豆飯角に比較して、ハ
ンとのヤ、齒のいへるあり、
同一ヤ、

或日、紅梅が
自分に向ふ。

讀めまいと冷りぬりぬ。馬無を云ふ、
原書の方が讀りやすいと云つて笑つた。
有らん。

千代子万太郎の發行

明治三十四年の夏の下

我樂多文庫の發行
文庫の發行

柳浪の筆の發行
小文庫の發行

長く續く發行
硯友社の發行

發行の發行
發行の發行

見

批評家連中

無関心な態度を用ゐるは、
閉鎖をせりぬ

るが、のりぬ。ヤ、
對するばかりは

よく、新進のなるは、
損を蒙る。

今までの経験で、
又他人の

このころ、
今度の會合

組織でやつて見よう。

これ、
發行する、
成つたの

で有らん。硯友社でよく、
成春社も、
社を

北の四十一番地の自分の家、
置き、
主筆を石

橋忠喜、編輯を岩倉健、
江見水蔭、
川上眉

見

山とて補助が尾崎紅葉と発表し

併し事業は紅葉の編輯で、自らは庶務を

持う

規約の第二條は、文学篤志者は何人

セザ入社する事を待——として社費は一月

拾銭と定め

第一號は二十四年六月十日に發行し

支社中の小説など雑文の他に、雲萍、露花の

二新進を認めし、一方は、参考とて作者不詳の好色万金冊

古文を載せし、第二號は、子蕉葉

(後、小栗風葉と成る)

艶如の二新進の作を認めし、猶新進粒子の雑文

ちり併載し、創中の、白節衣山草山人

とあるのは、今の柳原義光伯の少年時

代の書書で有つ。へん、喜多川麻生の

で、連の門に入つたので有つ

第三號に至つて、桐のや主人の

街談巷説を載せし。其中、二大

不足として、当時の文壇は、二大脚

本家と滑稽家と諷刺、鷗外氏の卓見とし

て、文壇は明堂を構つる、非ふるは替し、貧

9 見

第五号の第五號で爆発した。黒社東と題して。
 内田不知庵の批評は暗流の獻諷の美言を脱し、老成着実の真面目を以て聞えたる。又、近東傳の匿名の黒社東として皮肉的の罵詈雑言を放つがごとし、
 硯友社も亦其鞭撻を蒙りたるは、国民之友古號治季の批評欄内なるに見水蔭の野試合の評を見て知るべし、其評言中は硯友社を自して豆齋といへり、豆齋とは

と文學者として——文學者！汝の情人は貧あり。貧！汝の門楣を輝かす文學者あり。貧よ、願ふ汝が力の興ふけけを傷ふことあるらむを——と結語した。げ他は不知庵の世に狂詩二首有るに於て、記憶を辿ると、桐のやまるとは紅葉の匿名で有つれか知らぬ。紅葉は全く不知庵を好かぶかつれ。黒社の底におおしんまつぶを踏つけられ様ふ人間と評してある。

不知庵（今の魯庵）に對する悪感情は、千

見

花袋は最初、成春社に入社目的で、格高
 田正紅葉を訪ふは、それは江兄が書務を
 執つてゐるから、彼方へ行け、
 借りの外へまわりの有つた。その後、分つた。最初
 いつと積まひいて、セカクして、感心さ
 生を直る。青年で有つた。上州で、西南戦争に参る。戦死した
 つれ悲哀の点、自分と一致してゐるので、
 忽ち親しく成つた。能く自分の処へ
 世頃、成春社の若い人々は、
 能く自分の処へ

氣骨無しの意(中畧)一語説破的、見
 立謎々的の評言は、批評の真面目さ
 ずとは君の常々口にする語さあ、丁々
 (中畧)
 併しその談理は紅葉社中、長所であら
 つた。千原方紅と瘡刊(十二月一、五號)
 後は、全く世方の筆を断つて、人の評する
 変し、
 この第五號は新進作家として紹介され、
 の古桐軒といふのは、今の田山花袋の事だ。
 細山

A 10 20 青山三河屋書店製

見

いと通うさんと思つたのか。そんなら
 一代女の模範は随分人を食つてゐる
 が、^{あひ}秋の^{あひ}それを知らする。答はふく
 一知らする。それを^あ千の万に採
 録し、とすれば、編輯者の不明を世間で嘆笑
 されるばかりで、剽竊は物を録いで西鶴
 の一代女とは乱暴千草で、神薙子^{Kenmimiko}は致命
^あ的攻撃を請うた。扱つる^あで有る。
 守さるゝ。それを考へぬ田山花袋で思ひつ
 れの^あぼう。つまり江見といふ男が、どの後

No.

花袋は、殆ど毎日の如く書ん。最初^あは神薙子
 の雅號で短篇を持つて來た。一見する^あ西鶴の可一
 代女^あの、好色庵の一掃を、殆ど其儘書き
 写し、したもので有つた。
 どういふ^あ期間で、^あらんふ^あに南無^あの事をし
 れの^あが、自分^あは了解が出来ふかつた。硯
 友社は元禄文学の開山^あが、西鶴張りを
 下北^あと一人で有つた。り、^ありて
 花袋は、殆ど毎日の如く書ん。最初^あは神薙子
 の雅號で短篇を持つて來た。一見する^あ西鶴の可一
 代女^あの、好色庵の一掃を、殆ど其儘書き
 写し、したもので有つた。
 どういふ^あ期間で、^あらんふ^あに南無^あの事をし
 れの^あが、自分^あは了解が出来ふかつた。硯
 友社は元禄文学の開山^あが、西鶴張りを

見

西鶴物を読んではあゝ、一書それを試みして
 ざらりとひく、その程度のイタヅラ
 知れ ~~あんなに~~ 淡い
 であつた

花袋が毎日来て、その創作を示し、修正或
 は批評を乞ふので、硯友社の者は、江見の夫
 子が出来ると皆言い出した。

併し、事實は師弟同様の関係まで進んで
 れが知れぬが、年齢も僅少しか差が年、学力
 は田山の方が有つたので、それより自分は、杉
 浦重剛先生の薫陶を受けつゝる者で、先生

が、稲垣塾の者を、門生とせず、塾友と呼ぶ
 すべてを自分の友とせし、待遇もあんなの感
 有る。自分も亦門生を門生扱ひにする事を
 許さず、何れも只友人として待遇した。

又、角この特別の門生の友人待遇の最初の
 者は田山花袋のみで、同人の創作をせよとい
 するつもりは、出来ず、限りを盡した。

~~其~~
 紅葉の古閑番として泉鏡花が入つたのは、
 其頃の様子記憶してある。その時は、
 其の頃

見

酒奴サウナと、この時分の都の花は、武田御天子の造
 と、いふのが連載さうな、評判が好かつ
 ねが、議釋の制は、当ふふかつん。(紅葉のうさ)
 大ら端へ、紅葉初め、市中は能く通つん。何ん
 ぶ、疑り性の紅葉が、傳書ふど、翻いて研ゆれし
 武士の片肌凍む夜のうさ
 脚本の旗擧
 明治三十四年の秋

No.

少年で、能く使ふで来たが。常におどく
 と、その用を命じると、いれくしい
 様、思ひやれ。柳川春葉、小栗風葉の二人は、
 其後の考へ、記憶してある。
 柳川は紅葉の仲間、村山老人(鳥居の
 父)の甥ふりで、紅葉は春葉の事を、日
 つは海森を見せると、能くゴロ〜空探で
 ある。と、馬つてある。(紅葉の器倒しは、
 併し、慈愛が、愛をよ念するある。)
 常、机に向つてある者の、常、不足を感す

14 見

吉岡書店の
 何処まで自分を侮蔑してあるかの知れぬと思
 ら。禁分の名前が書いてある自分に向して。細
 客と蹴つた当時の事を、~~書いて~~能く言
 んふ中、好い事が頼りなりの心と思つた。
 無論自分は拒絶した。すると吉岡拓右師の、
 わが／＼出て来る。前の名簿はいくらでも謝
 り。是非書いて見るといふので有つた。
 意地の悪い自分は、それでは匿名で書か
 と云つて、朝顔を差した。徳勝心の強い自分は、
 或日、~~溜飲を下げる~~自分が叫んで。

No.

この仰天子は、新書百種の第十六篇を、
 世帯と、その第十七篇と、
 て、社の中村花瘦の、~~雑~~雑れ春を、~~出~~出すと就て
 同人單獨では、~~覚~~覚事といふ、~~か~~か、~~山~~山、
 の、~~ば~~ば、~~や~~や、~~山~~山、~~部~~部、~~水~~水、~~の~~の、~~碧~~碧、~~流~~流、~~を~~を、~~添~~添、~~え~~え、~~勇~~勇、~~子~~子
 自分より何か書いて見るといふので有つた。
 A 10 20 香山 三河屋紙行製

10 見

本を兄さんとかつん。それで自分も上野の園
 今、いくとどき午に入らぬ。世間は容易な原
 今もろがの原平盛衰記の世他は、俗版本
 討死の一掃を挿入した。然るに筋を立て
 石橋山と題を置いた。
 今もろがの原平盛衰記の世他は、俗版本
 今、いくとどき午に入らぬ。世間は容易な原
 本を兄さんとかつん。それで自分も上野の園

的り、劇改版のお話が出た。
 取材は何んぞも直した。併し、国民感情
 を訴へるべきが、私には好いと思ふのですが。
 手直しは書師の所隨意で……名題も、今ま
 での様々、妙な技巧を加へると、単純な方が
 好くは有りませんか。
 こんど調子で話し出さぬ。脚本は一巻の録
 音の指針として、其上で團圓た。執筆使
 好いものといふので有つた。
 当時の自分としては非常な光栄で有つた。

見

其他市中へ~~布~~布張り縫入りの立着板が配
 布された。今の如く活動ビラの行儀は如時
 代ふり、人目を驚かした。(着板の)桂舟が建
 いた。無名で
 石橋山は一日の外出し始りである。女序
 詞の中は。
 (前略)既に海せしむるをまるとして、
 急激なる進歩を原はずして、着々歩一歩
 主義を重り、今日の舞臺にて空地を行ひ
 得る様を勉めたり。

No.

十月一日の新聞に出た。
 告は各新聞に出た。
 紅葉山人の「紅白毒餌頭」の甘き土の野分
 の午草山江見水庵の「石橋山」とは指款
 すゝゝゝ事柄が、そので表された。
 十月一日の新聞に出た。
 告は各新聞に出た。
 紅葉山人の「紅白毒餌頭」の甘き土の野分
 の午草山江見水庵の「石橋山」とは指款
 すゝゝゝ事柄が、そので表された。
 十月一日の新聞に出た。
 告は各新聞に出た。
 紅葉山人の「紅白毒餌頭」の甘き土の野分
 の午草山江見水庵の「石橋山」とは指款
 すゝゝゝ事柄が、そので表された。

見 18

けんのあがきふいのごと、私信で取消しを申
 はんがが、果正太右のふ返事が来ん。こ
 れは当時の文壇(裏面)を表明してあるので、全文
 を左に掲げる。

（朱書で
 追記して
 ある）

片書面 国会社へあり
 片遣しは候人ども小生は
 五日目か六日目は一寸指さ
 社へ参るのち出立を定
 罷在依て片返事延引

押書片手紙押見仕候、一日片那推ふ
 片遣定通り拙者め候評論に属する部
 類のものは署名せりと責任を重んずる

演説されるものと信じて切つておられる有つ
 ん
 この序詞の中へ
 元来この脚本は正本として讀まするを以て
 く、其帳として演ぜしめるものと
 としふ意味で書いたなる、正直正太右の国
 會で、正本と台帳と何れが書ふのいふ
 構構を入れに来ん。
 書つた意味で、正本と台帳と分けたりとは
 なく、文章として重複の文字で表れりやと
 二意味を

19見

仰せの「二様」は虚言ありと辨せ
 んと心組合り候れめアノヤウふ次第と仰
 察し被下度猶申上度事あると區別し就て
 の所意見今少々取付けざれば4トつめを
 へ所は困り候
 又 是亦散股仕候さまが貴兄の善一歩
 主義へ略して斯くいふとは實に妙は形
 事於て進みざるも心は於て進むとの事
 事至極の所案どあり候は形を旧といひ心
 を新といはば新旧の調和を於て強て事を

No.

於てはかゝるづゝの本体の知れるやうに
 申すやうあるを心掛けしれ、め候ま、
 へそれ亦ふはナセ落名を致すとの所尋あ
 りば別な所答可申候し拙者も此やとめあ
 りしは明尤候
 / 悉く所意の通りは候唯「とて」
 の三字耳せチ故に區別しなふやうに覺え
 候より一寸のつぎ出候迄は候實は小
 生も今二三年も致し候は、脚本の「マ」が
 とありとも遣つて見申し候其節、貴兄

A 10 20 青山 三河屋紙店製

見 20

号 6

味 味 味 味
トシト
トシト

りとはうらや口授の葉（洒落）付假名
を附し候し小生は国民新聞の藝林奇話が
あきりばかしくいとへは

南翠が書冊乱堆の裡に悠然とて居
るふどはたまふ嘘あり南翠は客來
れは出て居るものを取附けての
産敷へ通すといふ事あり乱堆の裡に
あるもエラフんが又こゝれを取附
けるもエラフんどちよとちよエラキ
うは柏達あきり葉子の強きものと酒

No.

なし給ふふくば事あり早未或人の傳へ
申すべし
片胸の裏は正太夫様は所預り申上り片不
呈は後日猶何足ふりとも所廻し給下度
候
又拙者も矢張拙者も外（註曰く正太夫国
會紙上は拙者の匿名を用ゆ）不知庵口授
はふさげあき仰あり不知庵は裏も興り知
らず唯不知庵の小生宛へ書りて語り候話
の内は種を取候り二つ三つありとす

A 10 20 青山三河屋紙店製

21 見

「強しと風聴するはとり直すと其
人の性行を矯正するものあり

といふやうに考へ扱ふ人あるべく其人の

性行を自然に現はし合ふをうふ話をとお

りして彼の抄者の罷出候次第は候シカシ

貴兄に候る詔は古間事の由甚申請無之

候は出候敷く(註曰く)国会紙上抄者の

名を正す夫は下の如く記せり——日本

評議の文学一斑は、水蔭と松齋と湖邊子

と三幅對ありと見えざる、水蔭大い怒

A 10 20 青山三河屋紙店製

りて、紅葉の折り行いて口角沫を認す二

時間餘、腹の糞遂に治まりた。紅葉詔ど

持餘す、而して文学一斑は不知者之人の

筆に成るものあり)折りあり候事直し申

すべくや右所受るが如斯候 早之不備

十三日

正右夫

水蔭様

千代子万紀、昨日は熊之形配遣候

下奉謝の「冊餘の相骨」といふ

贈さいものが所纏を忍入り候

No.

三

見 22

金玉の名文が。梅し徳と一はホンの書き流
眉山の治の如き手紙が来た。それは書りよ
身を厭へ位みある山の雲雨
紅葉のふ手紙の端々
の一幕を撮った。

箱根塔の隣の環橋(鈴木)へ行つたのは

歩 一歩進境へ
明治三十四年の秋の冬

No.

紅葉の常筆と覚ゆ
日 紅葉思案函大兄を訪ふる
りせしめと所不在ありし時
の節何年ようくと彼様ふとこ
うで我儘を呆ら
自分は健康と害してみれし。又園茶花の
上段と間い下段く成つたの
箱根の温泉を鑑つて執筆する事
日 石橋山の空地探見より都合がぬい
有つた。

A 10 20 青山三河屋紙店製

見

明月両心を照るせどり、未だ其心を知らず。
 ある感慨ぞ。无香とたり、雲悠とたり、
 水の嘘がぞく。君山河は枕して、いひ
 時隔の如く、兼日稲妻の如く、やぶあり
 席捲して天下を覇たるべき勢を以て、墨
 取るべし、大勇氣！大野心！扶桑の野を
 傑の出る今。やるべし、やるべし、兼
 席捲して天下を覇たるべき勢を以て、墨
 取るべし、大勇氣！大野心！扶桑の野を
 傑の出る今。やるべし、やるべし、兼
 席捲して天下を覇たるべき勢を以て、墨
 取るべし、大勇氣！大野心！扶桑の野を
 傑の出る今。やるべし、やるべし、兼

No.

しは過ぎふいのか、それで急う古文書しを成
 す。如く、徳の文書は、人であるか、知れ
 るべき。あつた。
 半神鷄鳴を聞いて立つて舞ふ、東晋の英
 雄の境遇は果して誰の上ぞ。見よれよ明
 治文壇の浅猿し事、群小。八方は割擄し
 て取止めあき、謔語をいふ。其謔語一つ
 として取るも足るやありし。世を擧げ
 群雀噪々、維新は近き天地とはいへ又悲
 しかりや。さんどけ時あり、天晴牙を

見

本御春本町二丁目四番地より十九日に出
れので有つた。この

高瀬文淵を間、折んで、眉山と水陸とが、

新機運を登してゐる最初期で有つた。(後の眉

山は文子界りまり。白分が江水社を興する

至つた。

塔の層へは陣が訪はてゐた。その

瘦もまゐ。思案は譲賣の囑託で、懐庵古地

麗の視察より行く途中を一寸立寄りつた。

(この震災の惨状を思ふ事、酷く興有して、

A 10 20 青山三河屋紙店製

此下迄

神戸を走り、同郷人の家を神楽系訪うて、其所

の今嬢とを、後遂に結婚した。先

年永眠した取具夫人の息子が、それで有つた)

この頃、東京新報に黒川文淵(別姓高

瀬)が十八文傑を連載して二人並

べて評語した。其中、依田学海翁と自分とを

並べて二日づつで書かれた。或るは公認と若

輩の自分とを並べたのは、不倫かと憤慨した人

り有る。

どうぶの文章も堅いと云ふので、学海を鑑治

No.

25見

て
 ●文章が尖角鋭呑で、誇りよくいのりそ
 り原因が、おもつと思ふ。(中巻)芝居の
 甚懐のやうな柔かいものが、水産といひ、
 学海といひ、揃り揃つて堅いものを揃つて
 人達の手を待つて世に出るといふは、ど
 ういふ譯か(下巻)
 この十八文傑の取組は、

(竹倉村)	(三巻)	(紅梅)	(忍月)
(美妙)	(三巻)	(嶺の)	(思素)
(南翠)	(眉山)	(水産)	(三味)
(柳津)	(傳)		(虚)

No.

水産をるる、いかにへて有つた。
 当時水産の腕前は、ど九日の上るが如く、
 一方、それは幾程もよく、大抵石像の偉大ぶ
 る彫刻をするものは、水産の外はあつた。
 (中巻)水産の多少難癖が、よくあつた。
 ので、それの石工の持前の知識が、江
 見水産の筆を下すと、いや、難癖を折ふ
 ときは、トシカトシカト石のこつ
 ばが、四方で、揃んで、見知人の眼が
 ずいぶん、どうも、揃り堅い、

26見

力足らずと、いつと之俵端で叩きつら
 ける運命の我も有り。何んぼうかたれか
 知れぬが有らん。
 この暮は春陽堂か、懐庵震災の義損小説
 として後の月影山が發行され。これは堂
 主和田篤太郎が山崎監人といふ関係の有らん
 ので、名儀は幸堂得知の發起、宮崎三味神
 助の依り、一太郎の臺上絶筆金を、唯以良
 贈るといふので、笠村、紅葉、道達、露伴、
 思軒、岩本喜治、南翠、美妙、浪六、抱一庵

No. _____

（鴉外）
道達

この中へ自分を入れて考へるのは、文淵の好
 意では有つらぬ、併し何ハ文傑の結論
 文淵が傲然として、其公明正大なる態度を
 發表し、其処から見ると、~~自分~~自分を割り込
 むして是れを譯であらうが知れぬ。
 苦心し、石橋山は併し落弟の有らん。
 代を演藝會の採用され、三味道人の款
 經遊或落の脚本の有らん。

見 27

ては一寸新らしい書きぶりであつた。
 すゝと紅葉は神経を失ふ。今度各
 回が顔を揃へる。世の中が
 マリ下りない物を望んで。雨後は甚
 ビツマラナイ。他は何か書き直さばい、
 と密かにぬりぬり。
 雨後は何の傑作でもないけれど、紅葉の
 いろはが数作で済むか。今日の文壇
 人の見れば、~~マサカ~~の筆倒る程の
 であらう事を認識される事と、今度信

ては結構な
 ことだ

No.

香雪、省亭、桂舟、永悦、学海、西月、眉山、
 氷彦、京の某女衛、博、南新二、本草等二十
 四名の小説隨筆批評など、圖書を蒐集し、その
 中有る。紙数百九十六頁で定価三十銭と
 廉い。——二十五午一月九日の都新聞
 の批評が、
 雨後は、
 いて、紅葉の手許を歩いた。それは小宮史
 の賦首を先んじて帰宅す。と、
 て平凡な體を、素直に書いた。当此の於

A 10 20 香山三河屋紙店製

28見

か、紅葉の澁り性自、自分も二度まで原稿を
 書けぬので有る。
 全巻堂いふおどけ草紙といふ指燈雜誌
 が毎月出る。それより佳きものといふのを
 寄せぬ。(骨皮道人(西栗山城)といふ人の指燈作家として)
 それより、鏡喜といふ僧侶といふのを寄せ、郷里の
 山陽新聞といふ初見多といふのを初見
 送り。又来年の指燈の号で新説鶴飼舟
 といふ探偵小説を書いて置ける。
 都新聞といふ於ける探偵小説の探偵小説

其時自分も、それ程紅葉の号の出来が、
 別の胸の立ちふおつた。寧ろ自分の喜んぬ
 一、ア、社名紅葉より、より一歩上に出る
 の位と一、女、角、然るに自信を持つたの
 で有る。
 それで、陽坂越といふ短編を代りに出
 した。それの辛うじて通過した。
 とうせ義村さんが、原稿料は取れぬといふ
 位まで、何んぞよりのさういふ位でつた

29見

明治二十五年一月一日 読者新聞の一欄
 編輯員一同の茶賀新年の廣告が出た。其全
 部は、
 市島謙吉。伊藤長六。石川春吉。堀成之。
 富山清明。辰橋徳右郎。小沢勝次郎。賀
 来昌之。金子一基。高田早苗。中井喜方
 郎。中橋益吉。后林誠孝。松平康国。藤
 野房次郎。榎利吉。正田鏡吉。藤川先行
 関戸清吉。鈴木孝之進。鈴木光次郎。
 この中、其当時の新聞編輯部の全部より、政

No.

の当り、其の^中で水田南陽外史(英雄)
 の中新聞の編輯の評判が好かしく、そ
 れはカブれて、例の費用を拂償性か、所
 出れりといえん。
 それで明治二十四年の總收入、小説十八種
 の稿料合計二百十四円四十五銭也(十兩
 百今日保存)

銀と外金

明治二十五年の初春

見

三郎は、け時、健康を害してある。
 け頭、ヤツ、ケ口節、流行。
 け前後、盛ん、管を置く事、社中流行し
 る。紅葉を除くの外、競つて神田神保町の屋
 谷といふ店を通つた。入管の事を我々
 はトーンと稱し、手の前で自分の体を
 向ひ十字を畫き、トーンと呼んがの
 有つた。十字は品物、世接りを掛ける形。
 トーンは、つりトーンと入れたいふ意を
 有つた。

No.

事、経済、社会、文学、校正をいれて、そ
 れの二十一人分の。横書き
 それの、カットを入れて、印。
 江見忠功。山上亮。出羽守。雄。
 と、さう社員が、あつて、並列されたのは、
 つり景氣、あつた。あつた。あつた。
 我々三人は、印の月給を頂戴して、あつた。
 かく、時と原稿を貰つて、あつた。あつた。
 ぎあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 を光栄と思ひ、あつた。あつた。あつた。あつた。
 光栄と思ひ、あつた。あつた。あつた。あつた。

見 / 3

得て、針套の下、刃をばせ、出か、るも、小波
 の姉を出會して、~~何か~~ 叮嚀を ~~指さ~~ さんんの
 で、~~何か~~ 方々 ~~何か~~ 胸 ~~何か~~ 問へて ~~何か~~ 事 ~~何か~~ 出さず、~~何か~~ 及び返る ~~何か~~ 頭を
 け下げれと ~~何か~~ 珍録さへ有つん。
 自分おど、母は内緒で、亡父の遺品の刀類
 を悉く ~~何か~~ ト ~~何か~~ して ~~何か~~ 三つ ~~何か~~ ね。最社 ~~何か~~ は大きき刀
 を擔いで ~~何か~~ 運つんが、大和のいふ ~~何か~~ 刀の
 中味は ~~何か~~ イッラ ~~何か~~ 成り ~~何か~~ せん。今では ~~何か~~ 鏝 ~~何か~~ の方
 が ~~何か~~ 價値 ~~何か~~ がある ~~何か~~ ので ~~何か~~ す ~~何か~~ せん。鏝 ~~何か~~ け ~~何か~~ 脱 ~~何か~~ して ~~何か~~ 持つ

No.

見 / 2

尾 ~~何か~~ は ~~何か~~ 狂歌師の繪馬 ~~何か~~ 類 ~~何か~~ 助の弟で、文学
 通の大和 ~~何か~~ 高き ~~何か~~ と ~~何か~~ なる ~~何か~~ の ~~何か~~ ありて ~~何か~~ 後 ~~何か~~ 保平 ~~何か~~ と ~~何か~~ 改
 りて、つ ~~何か~~ 先 ~~何か~~ 頃 ~~何か~~ を ~~何か~~ 三 ~~何か~~ 越 ~~何か~~ 在 ~~何か~~ 部 ~~何か~~ の ~~何か~~ 責任 ~~何か~~ を
 て ~~何か~~ みて、芝居道の名物 ~~何か~~ 用 ~~何か~~ で ~~何か~~ 有 ~~何か~~ つ ~~何か~~ んが、今は ~~何か~~ 工 ~~何か~~
 成 ~~何か~~ つ ~~何か~~ を ~~何か~~ 隠 ~~何か~~ 居 ~~何か~~ を ~~何か~~ して ~~何か~~ 有 ~~何か~~ る。我 ~~何か~~ は ~~何か~~ 非 ~~何か~~ 常 ~~何か~~ の ~~何か~~ 同 ~~何か~~
 して ~~何か~~ 能 ~~何か~~ く ~~何か~~ 價 ~~何か~~ 値 ~~何か~~ を ~~何か~~ 圖 ~~何か~~ つ ~~何か~~ を ~~何か~~ 思 ~~何か~~ へ ~~何か~~ ん ~~何か~~ の ~~何か~~ 有 ~~何か~~ つ ~~何か~~ ん。
 小波、思案、二人 ~~何か~~ と ~~何か~~ あり、家箱の ~~何か~~ 喜 ~~何か~~ 品 ~~何か~~ を ~~何か~~ 大 ~~何か~~ 分
 持 ~~何か~~ 出 ~~何か~~ す ~~何か~~ 事 ~~何か~~ 就 ~~何か~~ て、~~何か~~ どの ~~何か~~ も ~~何か~~ 自 ~~何か~~ 方 ~~何か~~ では ~~何か~~ 都 ~~何か~~ 合 ~~何か~~ が ~~何か~~ 思 ~~何か~~ い ~~何か~~ の
 で、思案 ~~何か~~ の ~~何か~~ 之 ~~何か~~ を ~~何か~~ 託 ~~何か~~ し ~~何か~~ ん ~~何か~~ の ~~何か~~ 有 ~~何か~~ つ ~~何か~~ ん。思案 ~~何か~~ は ~~何か~~ 心

A 10 20 幸山三河洋紙店製

見

嫌つて着たのころ。思案は親前譲りのを着て
 るるのど、紅葉の癖のやうな何んたいア
 しては。酔ふんがね。喝つてるん。
 その紅葉の、いふ、工風を、海り技
 いれ外套を新調しん。それは前が見ると陣
 羽織の如く、後で見ると十徳の如く、それ
 で又外套の老あり、甚だ変テコ振する
 ものが有つん。
 今まで驚倒さるる思案を初め、社中
 の懐くが如く、紅葉の外套を向つて物議を起

豚の皮のやうな
 外套

No. _____

見

て入つしやい。といふのが、其通りす
 世中で七人の母、愛蔵しんといふ短刀が有
 つん。母が磨く保管してあるのが、どう
 して出さず事が出来たか。それで一筆を
 京出しん薪とスリ替へて遣いん事が有つん。
 諸物價の安かつた時代だから、外套の質入
 れは意外に高く七円は通用しん。以時分二
 重外套を着てゐる人は甚だ少かつん。眉山は
 花嫁の二人

A 10 20 青山三河屋紙店製

経済の上で
 有つん

見山

一

紅葉の之は降参して、いつの間にか昔
 通の替へて了る。今でもその珍外意を著
 て神樂場を下る紅葉の姿が、目先をくらくす。
 佐

紅葉館通は相寄るが續いてる。ヨリ

は歩行が、芝の山内、牛込や

小石川へ、テリ〜夜道を歩いぬ。馬車

の抱へ車のお供が待つてある中を、我々はお

供無しで歩いぬ。紅葉館の経営者やりは

A 10 20 寺山三河屋紙店製

油中拾ひのされぬのは当然で有る。(けれど

館姫連中も皆それ〜(歎)待たせぬ)

牛込では吉熊(正徳所前)を根拠地と

てる。鶏はは、小嵩、小ノ、小ふき、半玉小

鈴、後子ふどを呼んでるが、赤い時代は

は、早酒を飲んで(その少量)騒ぐ(猫)

ずぶい。それ故、創前ふど、八拾銭位

で有る。(紅葉の銅鑼声の都と逸。思案の踊七里先。花狭の踊

或時の創前請求書(紅葉)が、(猫)

出んのをみると、四拾六銭と、(猫)

猫えい。

No.

それを催促してゐる。此の考へる、
 の経緯は、^ツ法^ゆて^ゆ堂^ゆか^ゆでは^ゆあ^ゆか^ゆつ^ゆれ^ゆの^ゆん^ゆ。
 こゝを郵便でふく、書生は持^ゆち^ゆて^ゆ家^ゆに^ゆ送^ゆし
 ゐので、^ゆ橋^ゆ寄^ゆ所^ゆと^ゆ北^ゆ所^ゆとは^ゆ谷^ゆ一^ゆツ^ゆ際^ゆて^ゆ北^ゆ距
 離^ゆ、其^ゆ請^ゆ求^ゆ書^ゆは^ゆ折^ゆ目^ゆの^ゆ附^ゆいて^ゆ居^ゆる^ゆぬ。持^ゆつ
 て来る書生は、鏡花の着茶の^ゆで^ゆ有^ゆつ^ゆれ
 竹。

